

寝屋川市立田井小学校における取り組み 2007年度

1. 活動の概要

京都大学大学院教育学研究科の教育認知心理学講座と教育方法学講座の教員・院生による共同研究グループは、寝屋川市立田井小学校と連携して、算数授業向上の取り組みを行ってきた。本研究グループには、他大学の教員も参加している。

寝屋川市立田井小学校との連携は、同小学校が文部科学省委嘱学力向上拠点形成事業として算数科の研究を開始すると共に始まり、今年度で3年目を迎えた。1年目は、研究授業と事後の研究協議会への参加、および、授業ビデオを大学院に持ち帰り、研究会で討議することが中心だったが、2年目からは、授業設計の段階から参加し、先行事例や教材の提案などを行った。また、単元の事前と事後に実施する評価課題を作成し、子どもたちの事前知識を把握し、授業の効果を測定する活動も実施するなど、継続的、発展的な連携を進めている。

2. 活動状況

今年度も、各学年の授業研究に授業設計の段階から関わり、当日の研究授業と事後の研究協議会への参加を行った（表1参照）。

授業設計への協力においては、学年ごとにメンバーの中から1名が担当を受け持ち、その学年が扱う単元についての実践事例や子どもの理解プロセスに関する教育心理学的な知見等をまとめ、学年の先生に報告する。また、先生方が「学習授業案」（いわゆる指導案）を詳細に決定されていく中で生じた具体的な疑問点、問題などをうかがい、それに関連する資料を提供したり、先生の指導法の選択が子どもたちにとって学びや



▶協同的な学びを目指した算数授業

すいものであることを裏づけるような資料を提供することにより、実践者の視点に基づく意思決定のサポートとなることに努めている（図1参照）。こうしたやり取りの中で、実際の授業や参加する子どもたちを想

表1. 活動一覧

年 月	日	活 動	内 容
2007年 6 月	6 日	研究授業（第5学年算数）	先行事例や教材の事前提案、および、当日の研究授業の参観、研究協議会への出席。
	8 日	京都大学にて双方の責任者による打ち合わせ	今年度の研究方針、協力体制についての話し合い。
	26日	研究授業（第2学年算数）	先行事例や教材の事前提案、および、当日の研究授業の参観、研究協議会への出席。
2007年 7 月	4 日	研究授業（第6学年算数）	先行事例や教材の事前提案、および、当日の研究授業の参観、研究協議会への出席。
	20日	京都大学にて双方の責任者による打ち合わせ	3年間の研究を総括する研究報告書に関して話し合い。
2007年10月	31日	研究授業（第4学年算数）	先行事例や教材の事前提案、および、当日の研究授業の参観、研究協議会への出席。
2007年11月	7 日	研究授業（第3学年算数）	先行事例や教材の事前提案、および、当日の研究授業の参観、研究協議会への出席。
2007年12月	5 日	授業参観（第6学年算数）	日中教育共同研究センターと合同による、授業参観と事後の交流。

定した先生方の問題意識に触れることは、研究の新たなトピックを得ることにもつながっている。

研究授業当日には授業を参観し、授業後には、全校の先生方が参加される研究協議会に出席している。この場には、実践経験豊かな講師の先生をはじめ、寝屋川市教育研修センターや近隣の小中学校の先生方というように様々な立場からの参加がある。このような場は、実践の現場において自らの専門性を発揮するとは何かが問われる機会であり、院生にとっては研鑽の場といえる。フィールドに通うことは、教育実践とのコラボレーションにおいて研究者が果たす役割を追究する上で、重要な活動の1つとなっている。

このようなフィールドでの活動とともに、教育学研究科の共同研究グループは、定期的に算数学習に関する研究会を実施した。そこでは、メンバーが関わっている授業づくりに対してアイデアを出し合ったり、実施された授業のビデオを見ながら改善点について議論したり、評価課題の結果を報告・検討したり、算数学習や授業研究に関する研究動向をフォローしたりする活動を行っている。こうして、授業づくりに関する教育方法的知見と、授業での子どもの学びのプロセスと結果の内実とに迫る心理的・実証的な研究方法とのコラボレーションを積極的に追究している。

●学年の先生より

研究授業は小数÷整数の導入部分をする予定です。しかし導入の段階で、どのような小数を取り上げればよいのか迷っているところです。

「例」① $1.2 \div 3$ または② $5.7 \div 3$

①は整数のところ（1の位）に0がつきますが $12 \div 3$ から答えをイメージしやすいということが考えられます。②は概数にして商を見当つけやすいことがあります。また、商が1.9で①のような0となるより理解しやすいかな？とも考えられます（この場合筆算も指導する）。

児童がどのような過程でつまずくのかわかれば、①や②の選択や、指導計画を練るときの参考になります。

●研究グループより

よさの数は②の方が2つと多いですが、それぞれのよさが小数÷整数の学習にとって本質的なものが大事だと思われます。

そこで、それぞれの点について、以下の観点から検討してみました。

①を採用するよさ

⇒他方を採用した場合の問題点

●このつまずきの本質は？

●フォローの仕方は？

（以下略）



▶研究授業



▶研究協議会



▶研究協議会後の校長室でのふりかえり

3. 活動の成果

田井小学校が文部科学省からの研究委嘱を終えるにあたり、3年間の研究の集大成を書籍としてまとめることになった。その中には、本研究グループが実施した単元前後の評価課題や授業効果についての報告も盛り込まれる。これは教育現場と大学のコラボレーションの大きな成果といえるだろう。

また、本年度は日中教育共同研究センターの算数授業の国際比較の活動と連携し、中国から訪問団を迎え、田井小学校の授業参観および事後の交流を行った。田井小学校とのコラボレーションは、これまでに築かれた関係と成果とを踏まえ、他の新たなプロジェクトへと連携を広めながら今後も継続的に発展していくことが期待される。

（文責：河崎 美保）

図1. 学習授業案作成段階での田井小学校の先生と院生とのやり取りの例